総合診療フェロープログラム「川崎病」専攻シラバス

総合診療部 総合診療科 益田 博司

◎一般目標

川崎病は小児に特有の原因不明の全身性血管炎であり、小児科医であれば誰もが経験する代表的な疾患（common disease）の一つである。日本国内では年間 10,000～15,000 人の新規患者が発症し、そのうち約 3%が冠動脈病変を残す。特に巨大冠動脈瘤は生涯にわたる後遺症となり、生活の質（QOL）の低下や急性冠症候群の高リスク因子となる。

川崎病による後遺症を最小限に抑えるためには、迅速かつ正確な診断、適切な治療、継続的な冠動脈評価が不可欠である。また、病因の解明や新たな治療法の開発にも取り組む必要がある。本プログラムでは、これらに主体的に取り組むことができる専門性の高い医師の育成を目指す。

◎当院の特徴

当院では、川崎病疑いの症例や他院からの転院症例を含め、年間約 150 名の新規患者を受け入れている。全例において総合診療科が主治医となり、治療方針の立案や心臓超音波検査を実施している。難治例や巨大冠動脈瘤を合併する症例に対しては、循環器科や集中治療科と密に連携し、専門的な治療を行っている。とくに転院例を含む難治症例では、急性期の対応がその後の後遺症に直結するため、迅速かつ的確な診断と治療が求められる。

研究面においても、併設された研究所等と連携し、川崎病の原因究明や新規治療の開発、多施設共同研究（国内外）を積極的に展開している。総合診療科は、各診療科および研究機関とのハブとして臨床と研究の両面で中心的役割を担い、より良い医療の提供と高度な知見の発信を通じて、世界に向けて貢献している。

◎各論：獲得目標

一般的対応

- 川崎病の病態を理解し、科学的根拠に基づいた適切な治療を行うことができる。
- 心臓超音波検査を用いて、冠動脈病変の有無や重症度を的確に評価することができる。

- 川崎病に関連するリサーチ・クエスチョン（RQ）を設定し、研究活動を通じて学会発表・論文化を行うことができる。

◎臨床

- 川崎病の診断および、類似する感染症との鑑別を適切に行うことができる。
- 各種治療法の適応や副作用を理解し、状況に応じた適切な治療を実施できる。
- 心臓超音波検査を用いて冠動脈病変を評価し、必要に応じて冠動脈 MRI や冠動脈造影の適応判断および循環器科へのコンサルトを行うことができる。
- 罹患後の経過観察とフォローアップの重要性を理解し、川崎病外来を担当することができる。
- ワーファリンの適応、投与量、モニタリングを含めた管理を実施することができる。
- 他院からの転院例に対し、これまでの経過を踏まえた適切な治療方針を立案・実施することができる。

◎研究

- 川崎病に関する新たな研究テーマを設定し、データベースの構築や統計解析を行い、学術集会での発表および論文化を目指す。
- 多施設共同研究（PEACOCK、KIDCAR、遺伝コンソーシアム）の目的と意義を理解し、実際の研究活動に参画することができる。
- 川崎病全国調査の概要と重要性を理解し、調査活動に協力することができる。

◎関連学会

- 日本小児科学会
- 日本川崎病学会
- 日本小児循環器学会
- 関東川崎病研究会